

## 若いうちの苦勞は...

先日、宮城障害者職業能力開発校の大坪先生からお電話をいただき、「リレートーク」コーナーの原稿依頼のお話を聞きました。大坪先生とは、能開総合大において専門課程（情報処理科）を一緒に受講した仲です。いろいろとお世話になり、誌面をお借りして厚くお礼申し上げます。また、先生は私の訓大学生時代においては同じ科の大先輩です（とはいえ面識はなかったのですが）。

「リレートーク」についてはいくつかのバックナンバーを拝見させていただきました。能開総合大在校中の思い出等を掲載される方が多いようですので私もと思いましたが、「技能と技術」の副題が「職業能力開発技術誌」となっており、私も多少なりともそれに類する現場で働く者として、最近感ずるこ

とを述べさせていただきたく思います。

現在私の担当する科目は「電子計算機科」という名で、汎用コンピュータを用いたプログラミングをその主な内容としており、就職先はソフトウェア開発会社がほとんどです。対象の生徒はおおむね20歳代半ばで、その多くは転職者です。入校選考時の面接では、「手に職をつけたい」「転職を成功させたい」等、入校の意志の固さややる気を感じられるのですが、入校後の就職活動になると途端にその意欲の低下に首を傾げてしまうことが少なくありません。在校中なかなか就職先が決まらない決めない、あるいは就職活動すら始めないといった生徒がこの数年多いのです。

一方、ご案内のように昨今の雇用情勢はきわめて厳しく、年齢を問わず人を厳選する企業が増加傾向



にあります。確かにこの業界においても未経験者の募集は同様です。しかし、経験者の募集においては就職情報誌をご覧になるとおわかりのように、技術力さえ備わっていれば年齢は若干問うにしてもその求人数は決して少なくなく、逆に売り手市場といえます。訓練校を修了した後、企業において2～3年の修業を積みしっかりと技術を身につけ、いったん経験者となればその需要は高まり、明るい将来が開けてくるはずで、とにかくまずこの業界に入り込むことこそ重要であり、経験者となる第一歩なのです（もちろん技術を学びとることや、常に先端の技術を身につける努力は必要ですが）。このような業界への第一歩の重要性、および労働市場の将来性等については、生徒に常日頃から口を酸っぱくして力説し、就職意欲を喚起します。ですが、なにしろ就職するのは彼らの意志であり、その初めの苦勞が耐えられない、あるいは待遇に満足できないというのが踏み込めない主な理由なのでしょう。結果、前述のような就職活動の停滞を招くわけです。しかし、真に「手に職をつけたい」のならば、その前提としての苦勞は当然で、「若いうちの苦勞は買ってでもせよ」と私は思うのですが、彼らには通用しないようです。「やればできるのにもったいない」と

いったところですが。もちろん、訓練校の生徒のほとんどがそのような意識の持ち主というわけではありません。

もし、他の業界の若者にもこうした傾向が増加しているならば、いわゆる若年者の失業率の高さの一因でもある「自発的失業」の根源は、彼らの意識にこそあるのではと考えます。このような意識は、幼少時からの家庭教育、学校教育、本人の経験、社会（特にマスコミ）からの影響等、長年にわたり形成された強固なものと考えられ、その変革には即席的な訓練校等職業能力開発施設の努力だけでは限界かと思われま。とはいえ、「就職してこそ訓練校」ですから、前述した「若者意識」を少しでも変革し、就職率アップに向け日々努力していく所存ではあります。ただ一方では「むだな努力かな」と諦め気分に陥る場面も少なくありません。

以上、私の仕事の愚痴ともつかぬ内容でいささかうんざりだったかと思いますが、どうかご勘弁くださいませ。次回の「リレートーク」は、私が訓大卓球部（約2年間所属）でお世話になりました、富山県立技術専門学院の酒井聖司氏にお願いしてご

## 「技能と技術」誌原稿募集のお知らせ

「技能と技術」誌では、皆さまからの原稿を募集しています。日頃の職業能力開発に関する成果をご紹介ください。

特集原稿 平成12年9月発行の特集原稿を募集します。原稿締切 平成12年6月末

テーマ【企業における職業能力開発】

内容 企業における職業能力開発取り組み事例ほか

一般原稿 原稿は随時受け付けており、順次掲載していきます。

実践報告

調査・研究報告

技術情報

技術解説

教材開発・教材情報

企業の訓練

実験・研究ノート

海外情報・海外技術協力

ずいそう・雑感・声・短信・体験記

伝統工芸

問い合わせ、送付先

職業能力開発総合大学校 能力開発研究センター 普及促進室

〒229-1196 相模原市橋本台4-1-1 TEL 042-763-9069 FAX 042-763-9048